都護府から百六十里を距てた獨山守捉と記して居る地にその民を移したといふのであるから、所詮畏兀の領土で、そこからさして遠くも隔たらない地であつたことは疑ない。

第三の küsän といふ名は既に Müller 氏の發表した吐魯番附近の Murtuq や Sengim から出たトルコ語佛典の奥書中に現はれて居る。即ち前記 Toχrï und Kuišan (Küšän) と題する論文の第三章に收められた三種の斷簡の中に、Kuišan (Küšän), Kuisan (Küsän) 等と記されてあるのがそれである。回鶻文字では ui と ü とが同形であり、s と š とも字形が甚だ近似し、同一語に於ても兩形を混用して居ることもあり、草體で書かれた時には、判然讀み分け難い場合が少くない。それで Müller 氏は kui と kü には兩様の讀方を示して大事を取り、s と š とはそれぞれ字形に從つてその音を寫したから、かく種々なる讀方を掲げたのに外ならぬが、今この摩尼教文書や、別に次に述べる文書を參照すると、その中の küsän と讀むのが最も正しかるべきことは疑を容れない。

さてこの Küsän は何れの地であるか。Müller 氏は廣く史上に此の名を求めた結果、Transoxiana の貴霜匿でもなく、大宛の貴山とも思はれないとして、遂に Gandhāra の境域即ち Kabul の谷間に當る Kuṣana—漢書以下諸書に貴霜と記す地—と思はれると說いた。併しながらかゝる解釋を以てこの摩尼教文書に對すると、解き難き疑問に遭遇する。即ち此の文書の時代は後に論及する如く、判然とは定め得ないにしても、所詮摩尼教徒であつた回鶻部族が漠北を去つて高昌地方に據ることになつてから後の時代に屬するものと見ることに於ては、何人も異論の無い所であらうから、これを最も早く見ても西紀第九世紀の後半以後に書かれたものと見なければならぬ。かゝる時代に猶ほ Kabul の谷間地方を Kuṣana と呼ぶのが普通であつたか否かも疑問であり、また當時回鶻の摩尼教徒